



あいさつ (挨拶) について

赴任して3週間、生徒はチャイムがなく自律的に行動し、授業や給食、昼休み、部活動等を見に行くとTPOに応じた挨拶もでき、爽やかに声をかけてくれます。明るい地域・学校で伸び伸びと素朴に育ち、将来、「心の故郷」と自慢ができる絆（生徒・教員・家庭・地域）を感じます。

ところで、あいさつは漢字で「挨拶」と書き、「挨」は押す（心を開く）、「拶」は迫る（心に近づく）という意味があります。元々は禅宗で、「師匠が弟子に声をかけ、その返答を持って悟りを推しはかる」「相手に言葉を投げかけ、その反応で相手がどの程度の悟りの深さであるのか値踏みする」という意味で使われていた言葉だそうです。

また、「押す」と「迫る」で「押し合う」というイメージから、「自分の心を開いて、相手の心に近づく」「挨拶する側は心を開き、された側も心を開く」「お互いが心を開いて近づき、人間関係を築く第一歩にする」という意味にもなるかと思います。

しかし、ともすれば私たち大人は、「最近の子どもは挨拶ができない」とか「若者は挨拶もろくにしない」と、「挨拶は目下の者からするもの」と思い込んでないでしょうか。私も恥ずかしながら、時々、そのように思ってしまう。しかし、挨拶の語源に則ると、「最近の子どもは…、若者は…」と嘆く前に、目上の私たち大人が、率先して心を開いて挨拶を行い、相手の今の気持ちの状況を推しはかり、人間関係を築いていくべきなのです。

挨拶には、「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」「いただきます」「ごちそうさま」「はじめまして」「おやすみなさい」「いってらっしゃい」「おかえりなさい」等があり、その効用は、①感謝を伝えられる ②存在を認めていることを示せる ③仲良くなるきっかけとなる ④印象の良さを伝えられる ⑤緊張をほぐせる 等が考えられます。

保護者の皆さんは実感されている通り、職業人が「挨拶もろくにできない」や「挨拶すらしな」というレッテルを貼られると、仕事の評価を落とすだけでなく、人としての評価も落とします。社会に出ると、様々な人と多くの出会いがあります。世の中で「素敵だなあ」と思う人の魅力は、地位や肩書、仕事の出来不出来、話術のあるなし、経済力のあるなしではなく、子どもの頃に教わった「挨拶」のような小さな当たり前を、愚直に、丁寧にできる人だと思います。「挨拶」一つで相手を気持ちよくさせて、他人に感動を与えることができるのなら、身につけない手はありません。

これから様々な人と出会う、校外での学習が始まります。明中生が思春期の照れを乗り越え、相手が気持ちよくなる挨拶ができるよう、まず私たち大人が率先して、『あ・い・さ・つ』（「あかるく」「いつでも」「さきに」「つづけて」）を実践していきたいものです。

保護者様も、お子様や近隣の子への『あいさつ（絆）』について、ご協力をお願い致します。